

学生支援と大学



福原 隆善

(佛教大学長)

はじめに

昨今大学は、受験生に選ばれる時代となっています。そういった中で、学生支援は大学運営にとって重要な課題であります。三年前本職に就くに当たって大学運営の柱の一つに据えました。学生支援とは単に問題を抱えている学生に手を差し伸べるといったことではなく、一人ひとりの学生がいかに大学において自己の本分を延ばし成長し、満足度をもって社会に送り出すことができるかという点にあります。さらには卒業後のつながりをも持ち続け共に育っていく関係を保つことができるかという点であります。

過去には大学における自らのありかたを模索し、生きがいを見出そうと必死にもがいて自ら確固とした立場の形成を求めてきた時代もありました。そうした自立的なありかたを求めることが近年稀薄になってきているように思われます。そういう意味で時代の変化に伴い学生支援も時代に即応したありかたが求められます。

学生支援のありかた

学生支援には二面性があります。一つは意欲をもって入学し所期の目的の明確な学生に対応ができることであり、今一つは不本意入学も含めて就学の目的を失ったり、意欲の弱い学生への対応であります。意欲のある学生には一人ひとりに適した教職員の対応や、それを可能にするシステムが必要になります。折角の意欲を減退させないようにしなければなりません。一方、不本意入学等の学生への対応には種々のケースがあり、それは複雑になります。

近年の少子化とともに親子関係も変化してきており、教育熱心な親が主導権を握り、子どもの自立独立の育ちを押さえている感があります。子どもの時から紙おむつで育てられ、お尻の気持ちの悪さを表現することが少なくなっただけでも一因としてあるかもしれません。自己表現やコミュニケーションの苦手な若者が多くなっ

てきています。親ばなれ子ばなれがスムーズにできていない感もあります。対人関係については子どもの頃からいじめに遭うことの恐れを常に感じながらできるだけ自立たないようにする自己防衛的な生活を送ってきています。上にも下にも飛び出さない中間的な存在であることで安心するようです。すなわち、特色ある子どもが育ちにくい環境が子どもたちの世界にあるように思います。それでいて、塾に通い良い大学をめざすという競争の中で目的の大学に入れる場合もあれば、不本意入学を余儀なくされて入学する場合もあります。中には大学へ入る目的を達成したもの、次の目的を持ってないまま悶々とした日々を過ごす者もあれば、不本意入学で就学意欲を失っている者も少なからずでてくることになります。

本学の取り組み

一口に学生支援といっても大学の特性によっても異なります。特に大学は真理探究の最高機関であり、そこでは教育と研究の両面があります。この教育と研究において学生支援としてどちらを優先するかということが

あり、大学の特性によって異なると思います。先端科学等の分野を主とするところは研究を主体にすることになるでしょうし、人間教育等を主とする分野では教育に力点が置かれてくると思います。当然、研究か教育かという二者択一ということではありません。研究あつての教育であり、教育あつての研究であるはずではありません。

本学は、大正元年（一九一二年）に文部省令による学校制度の教育機関となつてから、平成二四年で百周年を迎えることになっておりますが、この間、豊かな情操を有する人材づくりに邁進してまいりました。昨年度、次の百年に向けての「新・大学宣言」を発信いたしました。ここでも今まで培ってきた人間づくりを引き継ぐことを宣言しております。折りしも文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に本学の「縁（えにし）コミュニティによる離脱ゼロ計画」の取り組みが採択され、今年度よりスタートすることになっております。この取り組みは意欲ある学生を支援することはもちろんですが、とくに途中退学している学生をゼロにしようというものです。在学中に種々の問題に遭遇し一人で悩んでいる学生を、教職員はもちろんのこと、周囲の学生や卒業生までもまきこむ一大ネットを張ることににより、種々の問題に対応し離脱者を無くそうという取り組みです。良い面を伸ばすには教職員の力量が問われますが、種々の問題を抱える学生を相手にすることはさらに困難を伴います。対応次第では取りかえしつかないケースも予測されるからです。対応には慎重を要することができそうです。しかしだからといって放置しておいてよいものではありません。深刻な問題を抱えているからこそいっそう対応が求められます。当然、責任がつきまといますが、特定の担当者だけが責任をもつということではなく、大学あげて支えてこそ本当の支援になることでしょう。まさにいのちのちのちのぶつかり合いであり通い合いであります。

本学は仏教を建学の精神としていますが、仏教中心の思想である縁起ということは、すべてのものもちつもたれつ相依相関の関係にあると説きます。その意味ですべては独立に成り立っているではありません。大学というキャンパスの中で一人でも問題を抱えている学生があれば、その学生が成り立つようしなければ教職員そのものも周囲の学生諸君も成り立たなくなります。他人の不幸の上に自分の幸福を築くことはできない

というのが仏教の基本精神にあります。したがって問題を抱えている学生を放置することは建学の精神からいっても問題があることとなります。責任論も大切なことですが、いのちのちのちの通い合いの場をつくる努力が必要です。

仏教の経典の中に一つの譬えがあります。ある毒矢を射られた人があつて周囲の人が治療のため毒矢を抜こうとしたところ、射られた人はこの矢はどこから飛んできたのか、誰が射たものか、毒は何かなどのことが解らない限り抜くなどいけません。周囲の人はそのことは後でもよく、今すぐ治療することが先であると言つたという話があります。問題を抱えている学生があれば、種々の議論をするよりその学生に対応することが先決であることは申すまでもありません。

おわりに

学生支援のありかたには種々の方法があるでしょうが、一人ひとりをどのように生かすことができるかという点でありましょう。しかしそのために学生一人ひとりを呼んで問題の有無を問うことは困難です。そこは大学の姿勢として常に相談に乗れる状況が用意されていて即刻対応することが重要なことでもあります。さらに自らの意志で動き出しにくい学生のために本学のようにネットをはりめぐらせ、積極的に対応できるシステムがあつてもよいでしょう。ただその機能が発揮されなければ意味はなく、順調に動かしていくことの重要性を感じている昨今です。